

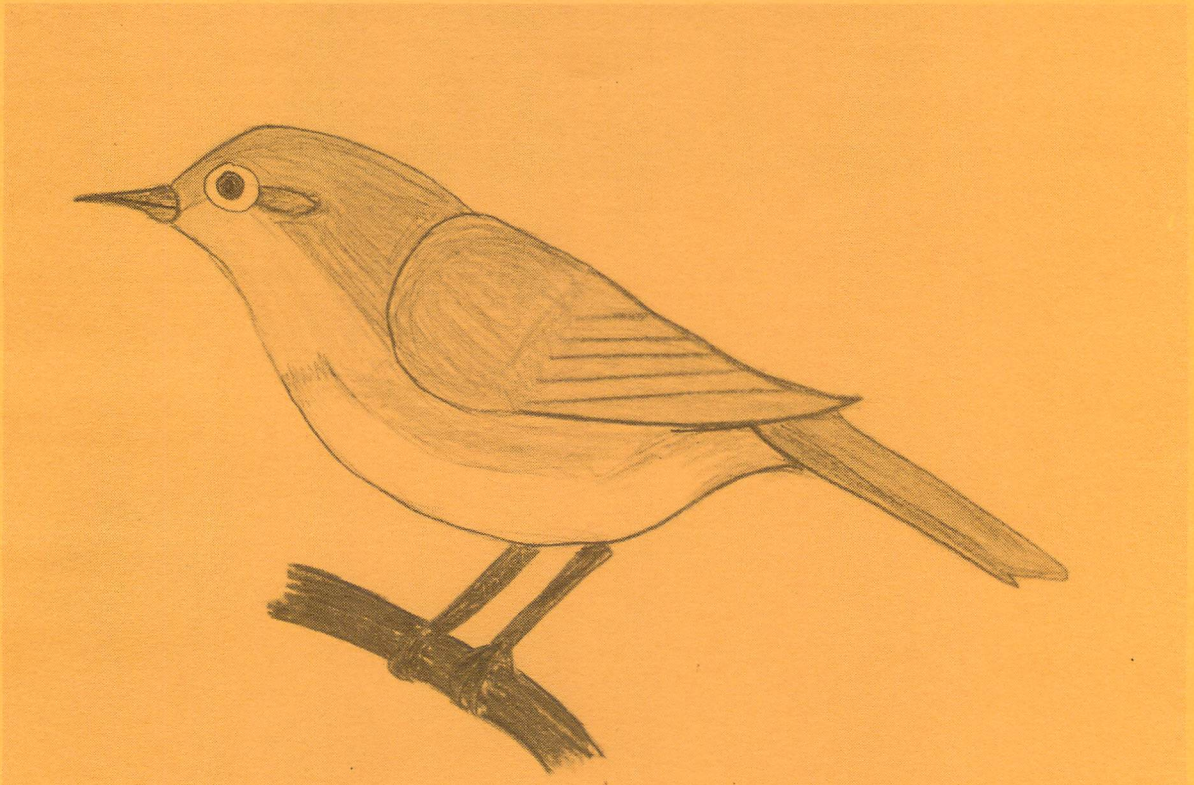
39号

愛鳥教育

1991. 12



全国愛鳥教育研究会



秦野市立北小学校 5年 三橋 尚史

愛鳥教育

No. 39号
1991. 12

目次

巻頭言	江袋島吉	3	愛鳥教育実践講座V		
野鳥観察体験記「余市川のヤマセミ」	赤石誠二	4	「昼休みウォッチングについて」	平田寛重	20
論説「学校教育で取り組むべき愛鳥教育の課題」	平田寛重	8	ぬりえコーナー	平田寛重	25
むらの理科ことはじめ(12)	金井郁夫	10	事務局日誌	岡本嶺子	27
愛鳥教育実践講座IV			編集後記	杉田優児	27
「子どもたちの愛鳥活動を支えるもの(II)」	渥美守久	11	「愛鳥教育No.40」の会員からの活動記録の投稿について	事務局	27
インフォメーション			事務局移転のお知らせ		27
「BOOKS 愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌」	杉浦嘉雄	16	愛鳥クイズ		28
インフォメーション「BOOKS」	平田寛重	18			

環境教育指導資料 才見記

(中学校・高等学校編)

会長 江袋 島吉

◇ 愛鳥教育に光明が

去る6月5日に、文部省より「環境教育指導資料～中学校・高等学校編～」が発行されました。正直なところ、小学校編を先にしてもらいたかったというのが本音でしたが、これも近いうちに出されるとのことで、鶴首して待つ気持ちです。

本著についての第一の関心事は、もちろん愛鳥教育とのかかわりでしたが、懸念していたことは、かつてあったような産業公害中心の環境教育、または、当今の多消費型生活様式からくるライフ・スタイル重視の方向に、指導の力点が指向されているのではないかと言うことでした。

ページをめくってみて、懸念されていたことが一応解消しているのを知り、ホットすると共に、思わず顔がほころんだのは次の2点でした。

まず冒頭のカラー写真(8枚)ですが郷土クレーン活動の1枚を除いて、他はすべて自然観察に属するもので、しかもトップに掲げられているのは正しくバード・ウォッチングの情景(構図はあまり良くないが)だったことです。

次に、第3章「環境教育に関する指導の実践」の項で、バード・ウォッチングの指導例に、4ページを割いていることです。

それは、「自然教室を通して行う環境教育」の実践例で、「野外体験学習コース」(13コース)のひとつ「野鳥の森コース」の、観察指導の事例が、詳細に記されている部分です。

ここでは、探鳥コース(地図)と、バード・ウォッチングの学習シート(ウグイス、メジロ、ヒヨドリ、ホオジロ、トビ)、バード・ウォッチングの指導計画が、極めて明快に例示されています。

すでに愛鳥教育を実施している関係者が、これらのことを目にした場合、どう感じるでしょうか。恐らく自分たちのやってきたことが、認知されたとの思いに至るのではないかと考えられます。

また、初めてこのような事例に接した者の中には、新しい目を開かれたとして、実施への意欲に駆られる者も、出るのではないかと考えられます。

いずれにしても、我々の立場からすると歓迎すべきことで、胸ふくらむ思いが致します。

◇ 愛鳥教育の行方は

ところで、本著は次の3章から成っています。

- 第1章 環境の保全と環境教育。
- 第2章 学校教育に於ける環境教育。
- 第3章 環境教育に関する指導の実践。

このなかで、第2章第2節「環境教育の意義と役割」の2「環境教育の目的」の項では、文部省による定義づけと思われる文言は見当たらずに、イギリスの初等教育に関するブラウンデン報告書(1967)、アメリカの環境教育法(1970)国際連合人間環境会議(1972・ストックホルム)、国際環境教育会議(1975)でのベオグラード憲章、ナイロビ宣言(1982)、環境と開発に関する世界委員会議(1987)、環境教育の推進等のための法律(アメリカ・1990)等の内容の引用にとどめ、3の「環境教育の基本的な考え方」の(1)で「環境教育の目的は、環境問題に関心をもち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、環境保全に参加する態度及び環境問題解決のための能力を育成することにあると考えられるので……。」と規定している点には、若干の奇異を感じずには居られませんでした。

また、前述の2で、「環境教育は自然保護教育が始まりと言える。」また「環境教育は単なる自然を保護するためだけの教育ではない。」との二つの言葉が、取り分け心に響くものがありました。

第1章の「環境の保全と環境教育」と、第2章「学校教育における環境教育」の第2節「環境教育の指導を通して身に付けたい能力と態度」までは、小学校の場合も同様と考えられますが、第3節の「学習指導要領に見られる環境教育にかかわる内容の取扱い」に関しては、新指導要領の「教科等の目標・内容・内容の取扱い」にみられる環境教育とのかかわりが、各教科・道徳・特別活動ごとに、精細なマトリクス表に示され、一目りょう然としている点に目をひかれましたが、小学校の場合にはどんな形になるのでしょうか。

いずれにしても、新しい視点に立った指導が展開されるわけですが、そんななかであって愛鳥教育の行方は?また、我らの進むべき道は?

野鳥観察体験記

余市川のヤマセミ

赤石 誠二

私とヤマセミとの初めての出会いは、昭和57年のことでした。それは、余市川ではなく、古平町にヤマメ釣に行った時のことで、滝のそばの松の木に止まっている姿を見たのです。その印象は、今でも忘れることができないほど強いものでした。しかし、その後、ヤマセミに会う機会にはなかなか恵まれませんでした。

2年ほど経った昭和59年の3月のことです。私は、実家が余市だったので、毎週日曜日には余市川に行き、好きな釣をしながら鳥を見に行くことにしていたのですが、その余市川で再びヤマセミに出会うことができましたのです。しかもそれは私のいる目の前10メートル位のところで、たてつづけに3回も、ハヤブサがヤマセミを追い、ヤマセミが水中に逃げるといった、手に汗にぎる光景だったのです。

ハヤブサが飛び去り、しばらくしてから、ヤマセミがわずか10メートルもの距離で見られたことの感動が蘇ってきました。この時、私は、余市川でヤマセミの写真撮影を始めようと心に決めたのです。

こんなに間近にヤマセミの姿を見ることができたのは、これが最初で最後ではなかったかと思います。この時、カメラの三脚がなく撮影が出来なかったのは、今にして思えば、とても残念で、悔しいことでしたが。

余市川支流の登川へ行った夏のある日、ヤマセミの一家に初めて出会いました。目の前の枝に止まってくれた成鳥と幼鳥の3羽のヤマセミの写真が撮影できました。



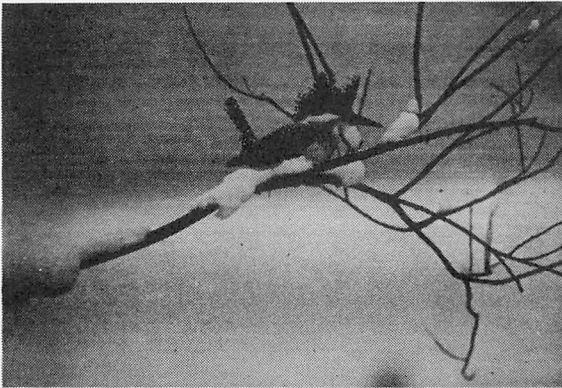
幼鳥は、成鳥とは違って警戒心もなく、ブラインドの中から顔を出してもなかなか逃げません。その時、初めて、幼鳥が魚ではなく木の枝をくわえて叩いているのを見ました。それは多分魚を採

る練習をしているのだと思いました。流れてくる木の枝や水の中を転がる石をくわえて、止まった木や石の上で一生懸命に叩いている姿は、とても興味深いものです。

昭和60年2月3日のことです。相変わらず、私は、毎週日曜日に、余市川でヤマセミを撮影していました。その日はとても寒く、気温は-21℃くらいだったのではないかと思います。カメラが動かなくなりました。

その時ヤマセミの胸に氷が着いているのに気が付きました。氷が着いたままウグイを採ってきたそのヤマセミは去年生まれた幼鳥です。胸の氷を取るのも忘れるくらい魚を採るのに夢中だったのは、それほどお腹が空いていたからなのでしょう。

その後、胸についた氷を取ろうとして、止まっている木の上から落ちてしまいましたが、すぐそばの木に止まり鳴いていました。たぶん恥かしかったのだらうと思います。15分くらいして、またもとの木に戻ってきて、何事も無かったようにしていました。



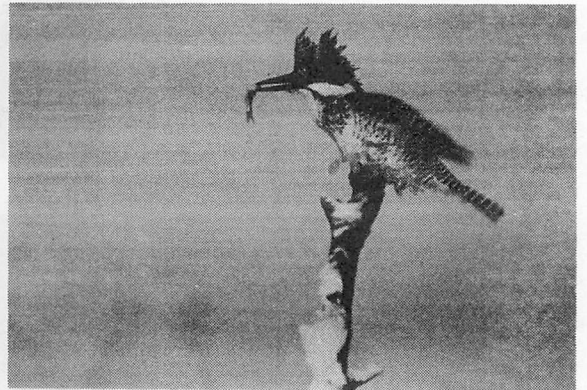
近頃、ただヤマセミを撮影しようとするだけの人が増えています。しかし、自分のフィールドを持たないで、楽をして撮影しようとするのは間違っていると思います。野鳥観察のルールやマナーに反する行為がいろいろと問題になっていますが、自分のフィールドを持つことで、もっともといろいろ変わった彼等の姿が見えてくるのではないかと思います。ヤマセミと接触する時に、彼等に不安を与えたり彼等の生活をじゃましたりすることのないようにするために注意すべきことは何かといったことも、自分のフィールドを持ち、観察を続ける中でわかってくるものなのです。

私は、ヤマセミの巣を探すのに5年かかりました。余市川は、巣を造る崖が少なく、川から500

メートル離れたりんご畑の中の土採り場に巣がありました。巣の前から20メートル離れたところにブラインドを張り、4月15日から7月20日くらいまで、ヤマセミの繁殖の様子を観察しました。

1キロメートル離れた川にもブラインドを張り、朝は巣前で観察をし、10時頃から川に行ってヤマセミのダイビング等の撮影をしました。

私は、撮影のために魚を採って餌付けをしたのは、はじめの1週間だけで、後は止めました。それは、そばにたくさんのヤマメ、ウグイ、アユ、カジカ、ドジョウが棲んでいたこともあります。餌付けはあくまでも人間の側の都合によるものですから、撮影のためだけの餌付けなら、それは止めるべきだと考えています。



私は、ヤマセミの親鳥より幼鳥の方が好きです。なぜかと言うと、親鳥にはない動きをしてくれるからです。先ほど述べたような、魚を採る練習をしたりすることも、写真撮影をしていて気付いたことです。幼鳥の行動がだんだん見えてくることで、ヤマセミに対する私自身の理解も深まっていたように思います。

撮影と観察のためのブラインドとヤマセミとの間の距離は、3メートルから7メートルくらいです。ここまで近付くためには、それなりの配慮と工夫が不可欠です。また、いっぺんにここまで近付けるといってもありません。欠かさず通い続け、驚かすことの無いように留意することで、ヤマセミにもこちらの存在を認めてもらえるのです。同じ個体でも、別の人に対しては、もっと距離を置いているようです。

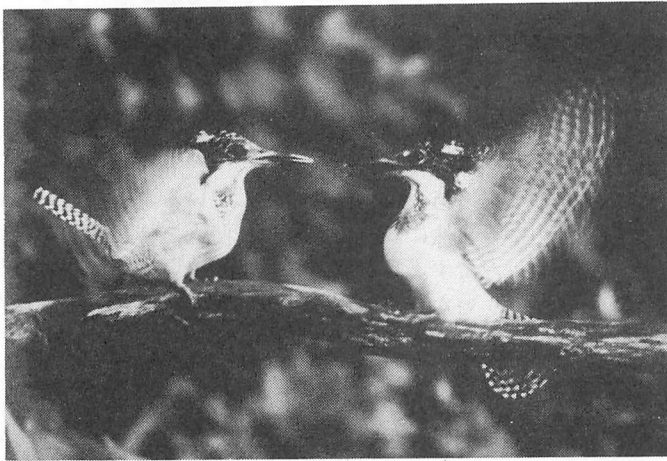
夜の観察と撮影をしたこともあります。

初めて冬の夜にヤマセミのねぐらを見に行った時のことです。やなぎの木の中にヤマセミが寝ていました。木には雪が積もり、ちょうど上の枝と下の枝が、かまぐらのようにできていました。

夏には、いつも決まった枝に止まっていた。ただヤマセミの熟睡時間は午後10時～午前2時くらいまでで、朝はかなり薄暗い時間から動きだします。2回目に行った時、午後11時頃ですが、い

つもの枝に、夏に巣立ちした幼鳥がいました。幼鳥は、手でさわれる距離にいましたが、ライトを当てても逃げませんでした。

その朝ブラインドの中に入り、ヤマセミの来るのを待つこと1時間、2羽の幼鳥がやってきました。枝の上で2羽同士の、喧嘩をするような、また、求愛のようにも見える行動が見られました。



平成3年6月30日に、ヤマセミの雄の成鳥が自分の羽根をくわえて水に落とし、疑似餌として使っている姿を見ました。この時は、水の流れが

速く、結果的に魚は採れなかったのですが、おもしろい行動だと思いました。これからもヤマセミの行動観察を続けて行こうと思っています。

学校教育で取り組むべき愛鳥教育の課題

常務理事 平田 寛重

今回も前回と同じく、学校での愛鳥教育の取り組み方について述べてみようと思います。

愛鳥教育は、基本的には、野鳥を護ることによって自然を保護していくことにつながる教育活動です。そして、また、愛鳥教育は、自然接触の領域だけにとどまらず、そこから派生する知識欲を満足させ、さらに自然のあるべき姿を考え行動に移して参加していくという方向をたどっていきます。

自然接触に関しては、以前は、身近な所に池や林や原っぱがありましたから、異年齢の遊び集団の中で、そこからいろいろな感覚が養われていました。また、家庭でも、子どもが親と共に生産活動に携わる場合もたくさんありましたので、親から子に伝えられていくものの中に、自然とのつき合い方も経験的なものとして含まれていました。

しかし、現在では、人間を取り巻く環境の変化により、観察できる鳥の種類数も個体数も減少する傾向にあり、観察の機会に豊富に恵まれる場所も次第に減ってきていますから、野鳥とのかかわりを身近なところで持つということも難しくなっています。

また、文明の進歩により、余暇を楽しむ者は増えましたが、反面、昔ながらの自然とのかかわり、親子のつながりのようなものは稀薄になってきています。

だからと言って、「それを自分ではできない。また、その意欲も関心も知識もないから、学校や社会教育に任せてしまおう。」というのでは困ります。自然接触の重要な部分、特に生命に関することについては、親子のかかわりの中（家庭教育）で機会を捉え、指導して行って欲しいと思います。

また、社会教育の領域では、学校の活動時間以外の時間（休日）にメインの活動が組まれますから、野外でのフィールドワークや専門家を招いての学習会などによって、自然とのかかわり方、自然のしくみや地域の自然史について学ぶことができます。

以上のようなことを念頭に置きながら、学校教育での愛鳥教育の役割を考えてみましょう。

まずは、子どもに野鳥の存在を意識づけるということが上げられます。もちろんこれは、大人にも意味のあることですが、感受性の豊かな子どもに対する指導は、大きな効果と意味とを持っています。また、このことを通して、親をも啓発し、身近な野鳥に対する意識を活性化していくことも大切なことです。

では、子どもたちにはどんなことを学ばせればよいのでしょうか。

第一に、自分の住んでいる身近な地域、郷土の自然について意識し、関心を持たせることが必要です。鳥が飛んでいても鳴いていても、意識がないかぎり、鳥は目には見えません。きれいなさえずりも騒音にしか過ぎないのです。鳥の存在を意識して、初めて、鳥への関心も湧き、自然へのあこがれがつのり、感性も磨かれます。また、科学的な探求にも迫っていくことができます。その一連の活動の中で、人はやはり自然が生みだした存在であり、自然と共生することによって安らかな生活ができるのだということを感じ取らせることができることでしょう。

では、具体的には、鳥を意識させるにはどのようにしたらよいのでしょうか。

それには、間接的および直接的な方法があり、双方の効果的な取り組みによって、子どもの意識・関心は高まっていきます。

直接的な取り組みとしては、野鳥を意識して見ること、また、見られる状況をつくるための（探鳥についての様々な取り組みの）プログラムを組み、ハードとソフトを備えながら展開していくことが上げられます。

具体的には、探鳥会です。初心者とその気にさせるためには条件を揃えるに越したことはありません。比較の見やすい大きさの鳥、あまり動き回らずじっとしている鳥、色や形や行動などが目につきやすい鳥などを意識して、時期や場所を設定していきます。また、教育課程の中での時間措

置なども考慮します。(新指導要領では、総論において自然とのふれあいについての記述が見られますが、具体的には書かれていないため、地域の実状に即して弾力的に運用していく必要があります。)また、1クラス分の人数が訪れても支障のない環境を確保することも大事なことです。

このような条件がすべて揃わなくても、その学校の環境や実情に合わせて工夫をすればよいのです。

冬の水辺で観察できるカモ類などは初心者にはうってつけです。また、田園地帯などでは臭いを我慢することができれば、牛糞の山や生ゴミ捨て場などにも鳥は集まってきます。

近くに鳥が来るような水辺や林がない場合はどうしたらよいでしょうか。そのような場合は、時間がかかりますが、鳥を探すのではなく鳥を呼んでしまうことが考えられます。野鳥誘致施設(ミニサンクチュアリ)のようなものから、エコアップした(生態学的に配慮された)ビオトープに至るまで、その学校の実状に合わせて子どもたちと一っしょに取り組んでいくのがよいでしょう。

従来から言われている給餌台・水場・実のなる木などの施設でも構いませんが、これから取り組むのであれば、それを乗り越えた自然生態系の復元をメインにした自然環境の創生に取り組んでほしいものです。

それには、より多様な生物が生息できるような環境を整備することが必要です。植物・土壌動物・昆虫・水生生物・両生類・は虫類などがすみつき、それらを餌とする鳥たちが定期的に訪れるような環境を創り出すことを目指してほしいのです。もちろん、鳥を驚かせないで観察できるように、2方向ないし3方向にブラインドになる壁をつくり、子どもの背に合わせたのぞき窓などをつくるといった工夫を施すこともお忘れなく。

ベランダや窓に面した中庭や裏庭など、あまり人の出入りがない所につくることも大事なことです。屋上などもむやみに人が出入りできないようにすると共に、ブラインドを通して鳥をのぞけるようにすることで、1クラス分ぐらいのスペースは簡単につくるができます。

望遠鏡や双眼鏡を使うことも効果的です。これらは人と鳥との物理的距離はそのままに、映像としては間近で観察することを可能にしますから、鳥を邪魔することなくかかわりをもつことができ

ます。

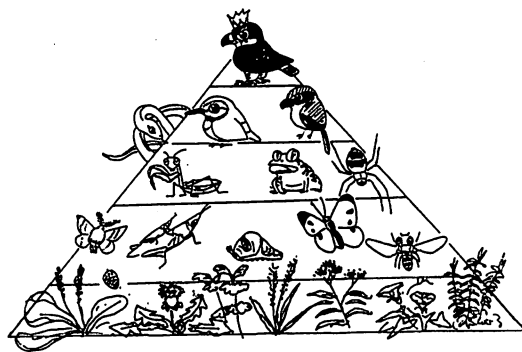
このようにして野鳥を間近に見ていきますと、子どもながらに野鳥を見て感じるものがあります。「鳥っていいな。」「自然っていいな。」という感情です。その感じる心が鳥とのかかわりの基をつくっていくのです。

また、朝会などで全校いっしょに、校庭を飛ぶ鳥や木々で鳴く鳥たちを観察することで、鳥への意識を高めることもできます。

次に、間接的に意識させるものとしては、ふだんの授業などで絵・写真・音声・映像などを使い、授業の効果をあげながら鳥への関心を高める方法が考えられます(No. 38の論説を参照)。また、特別活動やゆとりの時間などにおいては、やはり上記のようなメディアを使うと共に、ぬりえ・映画会・スライド会・工作などの活動を通して関心を高めていくことができます。

そして、直接・間接二つの方法を効果的に組み合わせながら、さらに新聞作りや調査研究などの科学的な学習へと導いていきます。このような道筋をたどっていく間には、クラスの中で鳥や自然をテーマに討論をする機会も出てくることでしょうし、新聞やテレビでのニュースなども話題に上るようになることでしょう。また、傷ついた鳥や迷子のヒナを拾ってきたり、鳥にかかわる公害等の話題も出てくるでしょう。そういう経験を経ながら、子どもたちは自然や鳥とのかかわりについて学習していくのです。

野鳥を見た感動から、鳥への関心が生まれ、探求心が高まり、科学的な学習へと発展する。そして、それらが基になって、鳥たちのために行動できるような人間に育っていく。学校における愛鳥教育は、このことを目指すべきだと考えている。



むらの理科ことはじめ(12)

なあんだ、カラス、かあ

副会長 金井 郁夫

すこし早めに教室へ行き、チャイムがなるまでの間、裏山の枯枝にとまっているカラスを見てると、長坂がやってきた。「先生なに見てんだ。」と言いながら並んで外を見る。「カラスだ。」には「なあんだカラスか。」との言葉を残して立ち去ろうとする。そこで、「ちょっと待て長坂。あのカラスは何ガラスか知ってるのか。」と問いかけると「ええっ、ただのカラスじゃあねえのか。」とくる。「そうよ、このあたりにいるカラスにはハシブトガラスとハシボソガラスとあってな。さてあいつはどっちかな、と見てたところなのよ。」につられて彼も外のカラスをじっくりと見はじめる。そこでチャイム。「今日はカラスの話から始めるかな。」とつぶやきながら教机の前に立つ。

あいさつが終って「今、その窓で長坂とカラスを見てたんだがな。」でひと休み。「なんでカラスなんかに見とれんのよ。」とやるのは岩波。「うん、そのカラスなんだが、このあたりには2種類いて、一つがハシブトガラス、もう一つはハシボソガラスなんだ。はたしてあれはどっちかな、と見てたのよ。」「それであいつはどっちなのよ。」に対しては「どっちだと思う。」と言いながらすばやく黒板に、ハシブトガラス、ハシボソガラスと書き並べる。

「そんなこと急に言われたって判るはずねえべえ。」と口をとんがらすのは西村である。「それでも世の中にはまぐれ当り、ということもあるからためしに言ってみな。」にさっと答えたのはいつも反応の早い橋山。「じゃあハシブトガラスだ。」にはしばらく間をおき、橋山の顔と外のカラスを見くらべるようにしてから、少しばかりポリウムをあげて「御名答、正解です。」とやる。すると、少しばかりうるさ型の平野が立ち上って「ハシブトとハシボソはどこがちがうんだ。」と尋ねる。

「問題は、ハシ、なんだが何のことかな。」と問いかける。「ハシかあ、はしっこじゃねえのか。」と口を開いたのは平野。「うん、なかなかいい所に目を付けた。カラスの体ではしっこ(はじ)にあるのは何だ。」には「頭」、「羽」、「足」と

いろいろな答が出る。そこで「一番近いのは頭。」と言う。一瞬室内に沈黙の時が流れる。「くちばしだんべー。」とすっとんきょうな声を出したのは長田である。「さすが長田、そのとおりだ。つまり、くちばしの太いのがハシブトガラスで、反対に細いのがハシボソガラスだ。」「二つが並んでくれればくらべられんけど、一つずつじゃあ見分けられねえじゃんかあ。」「まったくそのとおりだ。だけど見分けるポイントは三つある。その一つはおでこの線とくちばしの上が直角になっているのがハシブトで、おでこからなだらかにくちばしにつながるのがハシボソ。」と黒板に絵をかく。「次は鳴き声。ハシブトはカアカアとすんでる。ところがハシボソはガアガアとにごりがちで、アーアーとも聞こえるな。」「なんだかむずかしそうだな。」とひとり言は平野。「またハシボソは鳴く時におじぎをするから、これは第三のポイントで決め手にならあな。つまり鳴きながら頭を上下に動かしてればまちがいにハシボソガラスという訳である。これからカラスに出合ったらどっちか見分けたいうえ、どう住み分けているか、地図に記してみると立派な研究になるぞ。」と結ぶ。「うまくやって先生に見せれば理科の点上げてくれるか。」の橋本にはみんな大笑い。

「そういえばおれ、このあいだカラスと格闘したんだ。」の大房発言には全員注目してしまう。そこで「じゃあ大房に体験談をやってもらうか。」にはうなずく者が多い。「では大房ひとつ頼むとするか。」にはニヤリとしながら立ち上がり、「塾からの帰りに佐藤製菓の前を自転車に乗ってたらカラスが後から来て頭を羽でぶったたいでったんで、びっくりして自転車からおこったんだ。頭にきて、そばにあった杭を引っこ抜いてよく見たら、1mぐれえあるでけえカラスじゃんか。ちよっとおっかなかったけど、またむかってきたのでぶんなぐったら、うまく羽にあたってたのでよけながら逃げてったわ。」には思わず拍手がおこる。

愛鳥教育実践講座Ⅳ

子どもたちの愛鳥活動を支えるもの(Ⅱ)

常務理事 渥美 守久

1. はじめに

前回、愛鳥活動を支える6つの柱として、手のひらの図で①～④までを考えてみました。

愛鳥活動のきっかけや具体化は、学校の環境に大きく影響を受けるものです。④の活動計画を進める上で、環境づくりが重要であります。愛鳥・環境は、学校の組織が機能しなければ効果的に生かされるものではありません。広い意味を持つ環境づくりについて、私の実践の中から多少でも参考になろうかと思うことがらについて、種々考えを述べてみます。

2. 愛鳥活動の動機となる環境

〔1〕ヒバリをきっかけとした愛鳥活動

運動場を芝生にする気運が各地で起きた17年前のこと、植え付けた芝生を1ヵ年使用禁止区域にしておいたところ、シロツメクサの草むらの中にヒバリの巣があるのを子どもが発見し、愛鳥活動の大きなきっかけとなりました。さっそく、子ども達の問題として投げかけることを教師側は考えてみました。

児童会が保護活動の中心となって、無事巣立つまで運動場の真ん中にロープでさくをめぐらし、鳥獣保護区の立て看板を設けるなど運動は高まりました。いよいよ巣立ちという時、全校児童が見守る中、親鳥がひなを畑に必死に誘導していく感動的な場面を体験することが出来ました。

このことがきっかけで愛鳥活動は展開していったのです。地域の新聞やTVなどもめずらしい出来事を取り上げてくれ、愛鳥活動の大きな支援となったことを思い出します。これも自然環境を愛鳥教育に結び付けた一例であります。

昭和40年後半頃は、開発の進む都市近郊の地域での愛鳥活動は低調であったと思います。当時のことに少しふれてみますと、日本鳥類保護連盟の発行する皆様ご存知の雑誌「私たちの自然」ほしさに県へ問い合わせたことがあります。

愛鳥モデル校にだけ贈っていることであるとか、県で鳥獣保護の発表会がもたれているなど初めて

聞く話でした。その時、大会への参加にも誘われ、愛鳥教育の道に更に一步進んでいった訳です。

県での発表会にヒバリの一件を中心に初参加した時の驚きを忘れることは出来ません。参加12校中、児童数30名から100名程の小規模校ばかりで、私の方は600名程の中規模の学校でしたから、他校の取り組み方や発表内容に圧倒されてしまいました。シジュウカラと巣箱だけが共通した中心内容で、森も林もない新設校としては、肩身の狭い思いでありました。それ以来、何故スズメやツバメがテーマにならないのか疑問に思っていました。しかし、異彩を放つ格好とまではいかななくても、山の子たちは海辺の野鳥に関心を寄せてくれました。林野庁主催でしたから、今にして愛鳥教育の歴史の流れのひとつともなっています。巣箱とシジュウカラのことが頭から離れず、森を作らねばと大きな刺激を受けたのです。

3. 学校の森づくりと愛鳥活動

〔その1〕形北の森*

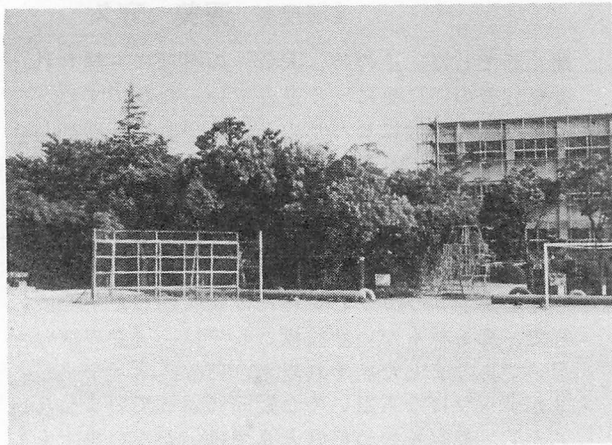
新設校に造った森の例

東京オリンピックに残敗した日本は、体力づくりへと急速に流れて行きました。体力養成が学校教育で叫ばれた時、アスレチックばかりとなりました。形北小は田んぼのど真ん中に新設した学校なので、樹木も点と線でしかなかった時期、遊具の安全管理の観点から一ヶ所に集中して設置してあったのを、当時体育主任であった私は、運動場の周囲に分散し、一周すると体力がつくアスレチックとして活用を企ててみました。その結果、子どもたちの遊びの自主性が生まれ、体力づくりに効果的でありました。

次に、元の遊具が設置されていた場所が600㎡ほどの空き地になりましたので、そこに森を造ることを考えました。

ダンブカー20台分の土を入れて小山を造り、森の中心にクロガネモチの大木を据え、花木を中心にPTAの方がゆずってくださった種々雑多な草木を手当り次第に植え込んでいきました。

落葉作戦と称し、近くの山林で腐葉土や落ち葉を全校児童で拾ってきて、林床を土がかくれるほど覆ってやりました。また、一ヶ所角の方に、泥の池と湿地も造ってみました。



形北の森 遊具のあとにできた森

次の夏になると、草は繁り、植えたはずのない草や木、ドングリのなるコナラ、シイをはじめ、カクレミノ、フジ、ネズミモチ、ヤマイモやヘクソカズラなど、山の自然が一斉に芽を出したり、つるを伸ばし始めました。

冬には、メジロ、ウグイス、カワラヒワ、ヒヨドリ、モズなどが給餌台の周囲に顔を見せ、ますますすばらしい自然環境に年々変わって行きました。小さいながらも周辺の自然以上の自然が湧くように現れたのです。土地利用のタイミングが成功した一例だと思えます。



形北の森

私が転勤することになった時、この形北の森をこれからも自然の庭として育てていって欲しいと願いました。それから10年余を過ぎた今も、枝もほとんど自然の姿で保護され育てられています。中心部の草木類は数をへらして暗さを増してはきていますが、こんもりとした自然林風の森が学校の緑の中心となって生きていることをうれしく思います。

一般に今までの学校の緑化といたら、立派な松や岩石を配し、子どもの手の届かない飾りの庭となっている場合が多かったように思います。たまに来校する来賓のための庭でなく、子どもたちが学習に生かせる校庭を造っていくのが、学校にふさわしい緑化の在り方だと言えるのではないのでしょうか。

* 形原北小学校

県知事賞、環境庁自然保護局長賞、
環境庁長官賞受賞

〔その2〕きじっ子の森*

自然林を学校環境にとり入れた西浦小学校の事例

海の町、すぐ後が丘陵地につながる風光明媚な恵まれた環境に住む子たちほど環境の良さに気づいていないのです。美しい周辺の松も松枯れですっかり山は荒れ、トビの巣も次々に消えて、その残りの巣を数えるばかりのさみしい愛鳥活動となっていました。そこで、愛鳥活動を通してこの自然に目を向けさせたいと考えたのが動機となって今日に至っています。

ここでは、特に「きじっ子の森」について述べてみたいと思います。

学校裏の神社林の松が枯れ、心配してながめていた時です。松の下に生育する照葉樹やトビの巣のあるアカマツまでもが知らぬ間に全部切り倒されてしまった突然の出来事は、トビの観察を続けていた子どもたちを驚かせました。松以外は価値のないものと思っていた神社側の山の管理の一環によるものでした。

そこで、ここを愛鳥の活動拠点として活用したので、森を学校の子どもたちのために貸してほしいと神社側に申し出たところ、意外にも許しが得られたのです。そこで、この0.7haの土地を「きじっ子の森」と名づけました。子どもたちが造る森、観察する林が出来た訳です。

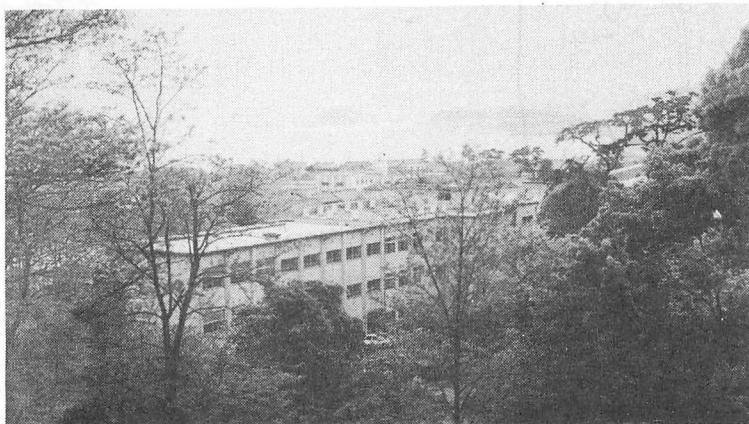
それまでの理科の学習といえば、草や木の葉を教室や理科室へ持ち込んで学習するパターンでありました。少ない標本をもとに室内で自然を学ぶやり方でした。そのことを改めるきっかけとなりましたし、野外で手にふれて学習する方向を目指して、この森を生かしてきました。

四季の変化がよく現われるよう、できるだけ自然の森の環境づくりを考えながら、森の中に観察路を設け、谷間の荒れ地に泥の池を造ったり、青空教室のベンチも造ったりしました。卒業記念として6年生が奉仕作業をし、PTAの支援をいた

だきながら造りました。

こうなると愛鳥クラブだけの土俵ではなく、児童みんなの宝の森となってきました。時あたかも、生活科という体験重視の低学年の教科が生まれ、この森は子どもたちの心身を鍛える道場となりつつあります。

教室に自然のほんの一部をもち込んだ学習から自然の中にたっぷり浸って森の中から見つめ考える学習に変わったことで、子どもたちは生き生きとしています。



きじっ子の森から見た西浦小学校

最近になって出て来た問題は教師側の問題です。浅い知識を切り売りする程度でお茶をにごせた教室での自然学習から、自然の中での学習に変わらざるを得なくなった教師側のとまどいです。あまりにも自然事象を知らなすぎる先生方のとまどいです。いかに先生方が自然好きになれるかが、理科や生活科の学習を高める基礎となることが明らかになってきたのです。

この森で四季に親しむ現職教育に力を注ぎ、愛鳥活動の情報を適宜流しながら全校の愛鳥教育へと実践を進めているところです。

森は今、美しい紅葉の季節を迎えました。

何百年の昔から松と照葉樹の緑一色におおわれていた海岸地域の自然も、松枯れによって落葉樹が台頭してきました。アカメガシワ、ヤマザクラ、エノキ、コナラなどが森を黄色に染めています。秋から春先にかけて、このきじっ子の森につらなる丘陵はトビのねぐらとなっていて、夕刻、200羽余のトビが校舎上空を舞う自然の環境です。

環境は人の生き方、考え方に影響を受けるもの

です。自然を取り入れ生かす方向で、各学校のおかれている校内及び周辺環境を見つめ直し、可愛い小鳥の訪れてくれる愛鳥教育の環境づくりを考えたいものです。

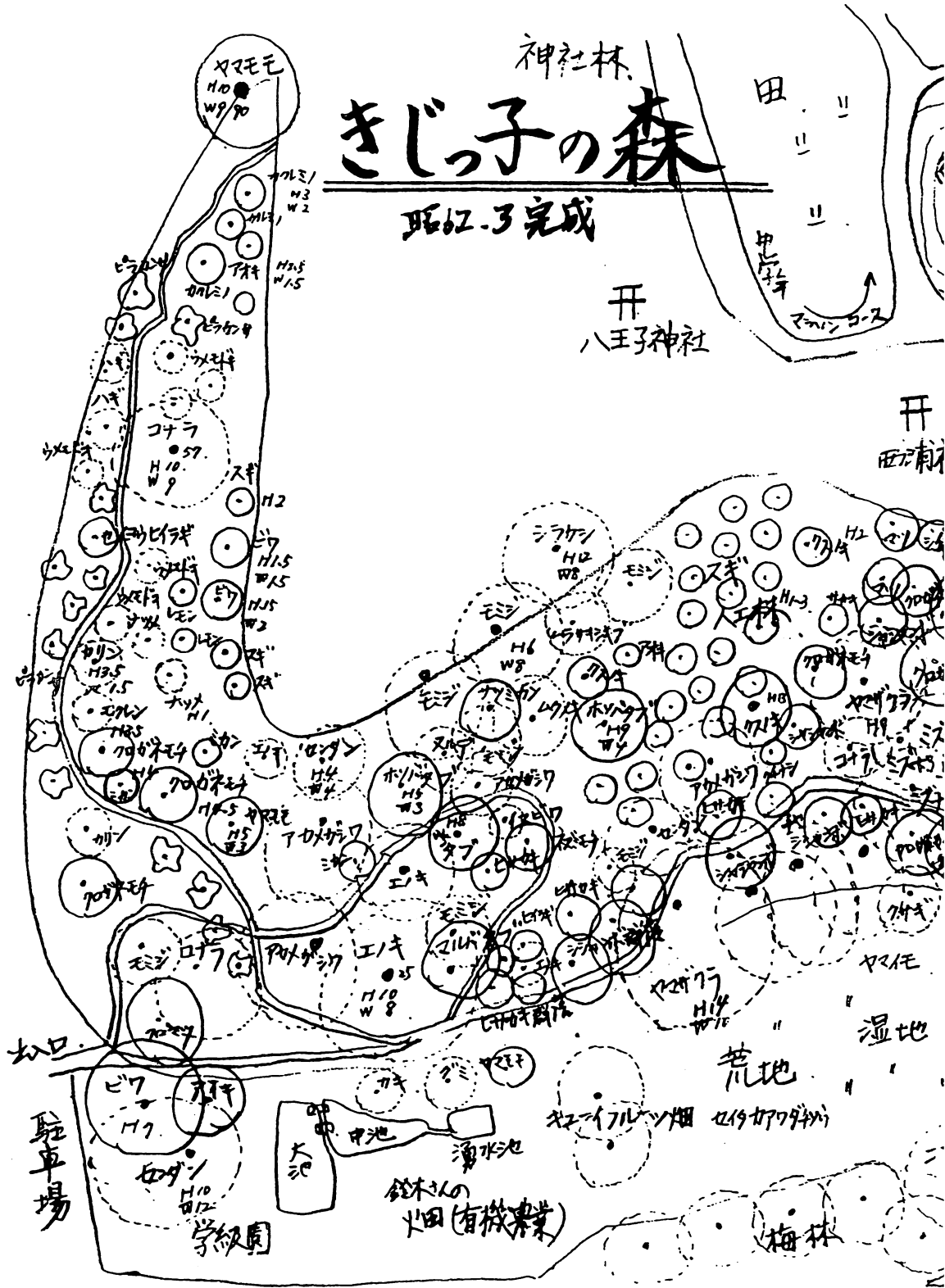


きじっ子の森にあるトビの巣

* 西浦小学校

県知事賞、愛鳥週間における財団法人日本鳥類保護連盟会長賞受賞

図 1





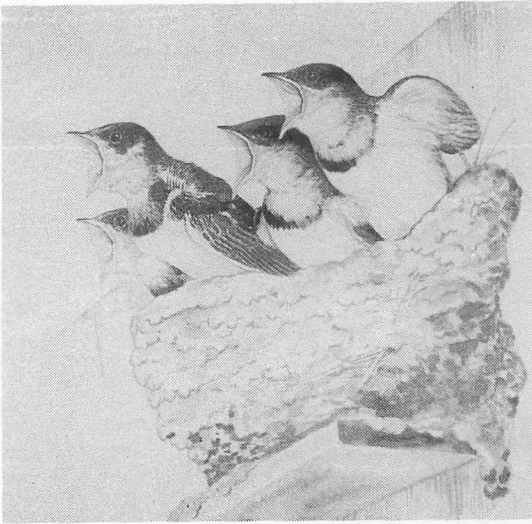
インフォメーション Books 愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌

常務理事 杉浦 嘉雄

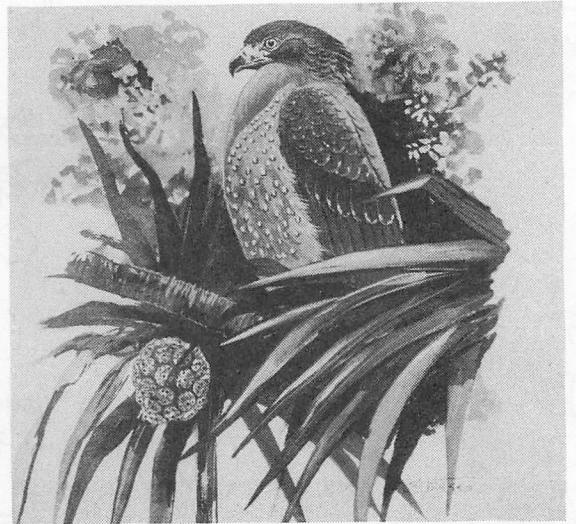
今回は、(財)日本鳥類保護連盟会報誌「私たちの自然」の最近の号(1990.12月号～1991.11月号)の中から、シリーズで掲載されている編集テーマ毎に紹介したい。

自然はともだち

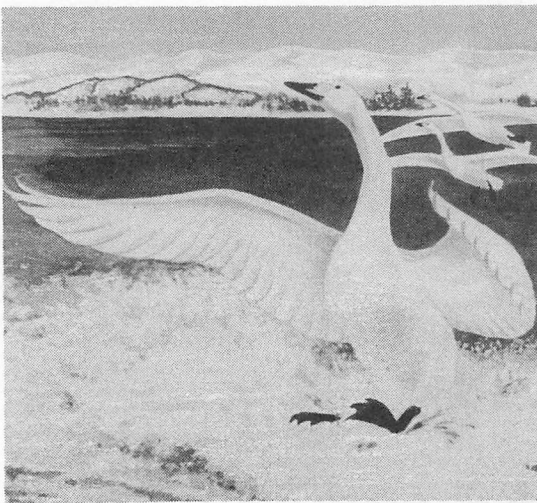
動物画家の松原巖樹氏による野鳥を中心とした自然の美しい絵と心あたたまる文章からなる人気のコーナー。氏の絵は、野鳥研究者や愛好家はもとより、愛鳥モデル校の子どもたちにも実に人気がある。この図は、白黒の精密画であるので、理科・国語・図画工作などの授業やクラブ活動の教材としても活用することができる。



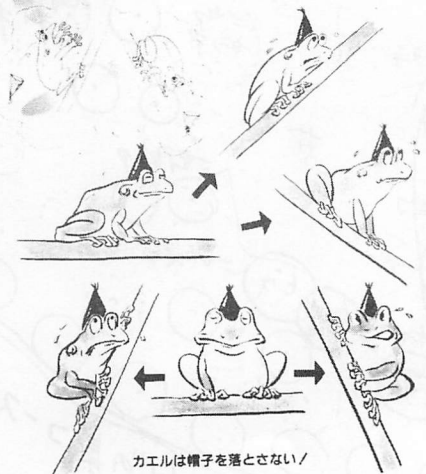
身近な野鳥の中でも特にツバメは、育雛から巣立ちまでの生活を間近で見するのに最もふさわしい。教科書にも数多く登場している。



代表的な野鳥はもちろんのこと、稀少種や天然記念の野鳥も紹介される。このカムリワシも、実際に見た氏ならではの迫力を感じさせる。



教科書に最も多く出てくる野鳥のひとつ、ハクチョウ。この絵も魅力的な副教材になるであろう。



カエルは帽子を落とさない!

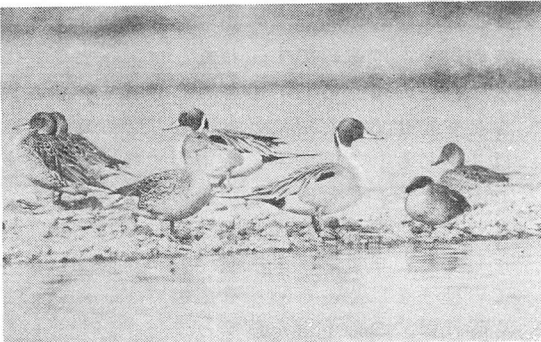
「自然はともだち」というタイトルのように、野鳥だけが登場するわけではない。時にはこんなユーモラスな自然の友達も紹介されている。

野山のたより

会員の写真やイラストなどを紹介するコーナー。プロ級の写真から初めて撮った写真まで実にさまざま。しかし、どの作品も、北は北海道から南は沖縄までの魅力的な自然との出会いの瞬間を捉えている。



最も身近な野鳥のスズメが桜を食べるシーン。知らなかったスズメの一面を発見できたのでは。



冬鳥の代表選手オナガガモ。プロ級の写真は、教材にも活用できる。



野山のたよりは、野鳥だけに限らず動植物全般にわたっている。時にはこんな悲しい出会いもあるのだ。

自然の教室

伝統的シリーズというべき「自然の教室」。毎年掲載されるとは限らないが、息の長い人気あるコーナーだ。

1991年4月号「春の野原に出かけてみよう！」

高尾山は東京の緑のオアシス。新井氏が、早春の自然観察のしかたを肩肘はらずに紹介している。

1991年8月号「鳥、川を語る」

浜口氏が、野鳥の視点で川の環境について鋭く語っている。野鳥たちが互いに話し合うという表現のしかたが実に効果的である。ロールプレイングにも最適な教材。

その他

その他、自然保護、野鳥保護関係の国際的情報も多数掲載されている。

1991年6月号「カリマンタン紀行ー熱帯雨林の国立公園を訪ねて（宮ヶ瀬ビジターセンターレンジャー 森 美文氏）」

カリマンタンとはボルネオのインドネシア名。現場の取材による新鮮な報告がなされている。

1991年7月号「湾岸野生生物救助隊に参加して（日本鳥類保護連盟主任研究員 関 健志氏）」

氏は、湾岸戦争で油まみれになった野鳥たちを救助するボランティア活動に携わり、現地での体験や収集した情報をもとに、私たち日本人が初めて知るとような貴重な報告している。

その他、カムチャツカでの日ソ合同鳥類調査（1991年9・10月号）やサハリンの鳥類観察記（1991年11月号）など、今まであまり知られていなかったソ連の鳥類に関する報告もなされている。

愛鳥教育関係の情報も数多く掲載されている。1991年12月号では「愛鳥教育の国際交流、日本とネパールの国際交流」について、1991年1月号では「平成3年度愛鳥週間用ポスター原画コンクール」の入選発表、1991年2月号では「第25回全国野生生物保護実績発表大会」の各賞と審査経過、1991年5月号では「第13回少年少女愛鳥作品コンクール」の表彰風景と各賞について紹介された。

インフォメーション BOOKS

常務理事 平田 寛重

(財)日本野鳥の会編：みる野鳥記1-4,
あすなろ書房、各1500円

1.スズメのなかま 2.ツバメのなかま
3.カワラヒワのなかま 4.モズのなかま の4
点が刊行されています。順次、ヒヨドリ、ツグミ
というように刊行が予定されています。

このシリーズは、初心者のバード・ウォッチングのための資料として使われることを想定して作られていますので、野鳥を見るポイントなどについての大変よい参考資料となります。野鳥に詳しいイラストレーターによるイラストがふんだんに使われ、野鳥の形態や生態・繁殖・分布などについて事細かに解説されています。子どもを含めて初心者にとっては好都合の資料です。教師が子ども向けに資料を作ったり教材研究をしたりする上でも活用することができます。また、子どもたち自身が学習したり、新聞や啓蒙用の資料を作ったりする時などにも利用できそうです。

本書のような種類別にシリーズ化する企画は、おそらく初めてではないかと思えます。バード・ウォッチングからもう一步進んだ簡単な調査活動についての参考資料としてはあまり期待できない面もありますが、このシリーズの登場により鳥を見るのが前にも増して面白くなることは確実です。



レイチェル・カーソン：
センス・オブ・ワンダー、佑学社、1200円

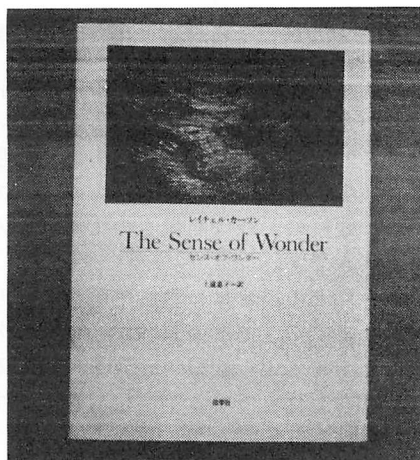
この本は、「サイレント・スプリング」で世界的に知られているレイチェル・カーソン女史が、その晩年に姪の息子であるロジャーと共に北アメリカのメイン州のある海辺や森の中での自然と過ごした経験をもとにして書かれたエッセイである。

この本の中で作者が私たちにロジャーを通して話しかけている自然とのかかわり方には、学ぶべき深い意味があります。

「自分の子どもに自然のことを教えるなんて、どうしたらできるというのでしょうか。わたしはそこにいる鳥の名前すら知らないのに！」と嘆きの声をあげるのです。わたしは、子どもにとって、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要でないといく信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとつとびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。(本文から引用)

本書では、初めからおわりまで、自然接触の基本について触れられている。「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」こ

の味わいのある本を何度も読み返しなが、自然とのかかわりやその新しい展開を試みては如何ですか。



金井郁夫： 身近な自然観察のすすめ，
東洋館出版，2200円

本会副会長であり、「愛鳥教育」の「むらの理科ことはじめ」の連載でおなじみの金井郁夫先生が最近書かれた本です。副題に～親子のためのやさしい自然の観察～とあるように、身近な話題から内容が展開されています。

「自然観察は家から始まる」というタイトルで1章が構成されており、寒暖計や天気予報などの何気ないものでも、ちょっとした視点を加えることにより、自然が少しずつ見えてくるような楽しい書き出しです。

内容は、家から街、そして、日帰り、泊まりがけというように、だんだんに視点がマクロ的になっていきます。

墓参りの墓石をヒントに自然を楽しんでしまうというのはいかにも金井先生らしいと思いました。日常生活の中に自然観察を取り入れ、ほんの少しの余裕と見る目をつくっていくことで、不思議な世界がたくさん現れてきます。もちろん、見える人にしか見えませんが。あなたも、見えない世界が見えてくるこのふしぎなめがね？を1冊いかがですか。

成層火山(コニーデ)のできかた

<p>①きのご雲噴火</p>	<p>②くりかえし</p>
----------------	---------------

はまちがいなく火山です。そうした山はよく〇〇富士とも呼ばれています。

さらに山へ登って頂上に立った時火口があればこれも火山、中腹や山麓に温泉が出ているのも火山の証拠となります。地中の熱いマグマが噴出してできたのが火山ですが、マグマのねばりけや噴火のしかたで山の型もいろいろになります。

一番型のよい富士山型はマグマが高く吹き上がりキノコ雲型にひろがり大きい溶岩が火口近くに落ち、軽い火山灰は遠くまで飛んでゆきつまった物がなだらかな斜面になっていったのです。このくりかえしできれいに裾野をひく山形ができたのです。日本語では成層火山と言ひ専門的にはコニーデと呼んでいます。

次がトロイデと呼ばれる鐘状火山、こんもりと盛りあがった形はねばりけの多いマグマが地上にわき出てもつたのでして、関東地方では箱根の駒ヶ岳がその例になります。そのほかお皿を伏せたよ

100

愛鳥教育実践講座V

「昼休みウォッチング」について

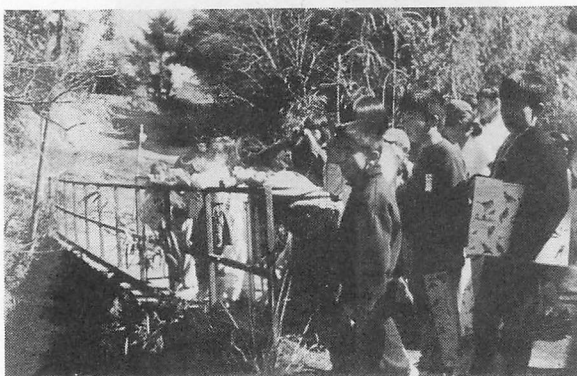
常務理事 平田 寛重

例えば、あなたの学校の周辺に雑木林・田畑・河川のような観察に適した環境がある場合、そこを日常の観察のためのフィールドとし、昼休み中の30分前後のわずかな時間を使って比較的簡単にできるバードウォッチングのことを、「昼休みウォッチング」と呼ぶことにしましょう。

ープの皆が昼休みの時間を使える時に実施できればよいという気楽な感じでやるのがよいでしょう。特に低学年の子どもには、あまり無理強いせず、散歩気分で、連れ出した方がよいでしょう。しかし、観察の記録は簡単なものでもきちんととっておくべきです。

なお、以上の場合には、教師主導型の探鳥会の形式になりますが、児童委員会が主催し、希望者を募って、学校周辺の観察コースを探鳥するようなプログラムを行っている小学校もあります。

それでは、さらに、具体的な進め方について述べていくことにしましょう。



観察グループの単位は、子どもたちが約20人（異学年の縦割り構成）と、引率・指導する教師2人（うち1人は比較的野鳥に詳しい者）です。

野鳥に詳しい教師が鳥を探し望遠鏡の視野に入れて、小さい子から順にその鳥を見せてやります。

高学年の児童や野鳥クラブ員なども積極的に活躍できるように指導していけば、より楽しくなごやかな雰囲気になっていきます。

4月当初に観察グループの構成員を決め、グル

グループ作りについて

学校の規模によって多少異なりますが、1グループの規模はなるべく少ない人数がよいでしょう。

神奈川県伊勢原市立高部屋小学校の例では、各学年4クラス、全校で24クラス、1クラス30~44人、職員数30人の規模でしたので、各クラスをA~Hの8つに分け、それらを1~4組について異学年の縦割りグループとしてまとめました。人数調整の結果、実際には、各クラスとも、1グループ当たりのメンバーは3~6人、1グループ全体のメンバーは28人前後になりました（表1）。

引率・指導する教員は1グループ当たり2名と

表1

	1-1	2-1	3-1	4-1	5-1	6-1	
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 A B C D E F G H	青木厚雄	前澤幸男	茅川	暢須藤晋論	秋山晃	二麻生智彦	
	関野大輔	間山	司左々木	拵井博光	秋山匡晴	大崎隆光	
	谷幸子	山口寛隆	山口邦芳	小呉幸美	荒井英毅	前澤岳男	
	田中聖子		赤津奈緒美	堀江春奈	秋元里織	秋山由美子	
			塩川千枝子		秋山久美子	菅原祥子	
						山添紋子	

します。1人は1年1組の担任から順に1名ずつが担当し、もう1人の“野鳥に詳しい教員”には、校務分掌で愛鳥部に所属する6人が持ち回りで当たるということにしました。

しかしながら、いざ活動をし始めますと、一般の教員の方は、不安がつり、愛鳥部の教員の方が毎回リードせざるを得ない状況になってしまいました。一般の教師にしてみると、バードウォッチングは慣れていないので、鳥を探すのがとても困難のように感じられたのでしょう。

また、「昼休みウォッチング」の時間は、昼休みの20分余りを使いましたが、給食・掃除・昼休みという変則的な時程でしたので、慣れないうちは、5校時に食い込んでしまうことがありました。

このように試行錯誤の連続でしたが、全グループが、1年間に1回は、サイクリング・コース（校舎裏のフィールドの名称）で昼休みウォッチングをするという当初の目的を達成することができました。

「昼休みウォッチング」実施日について

最初のうちは、実施できる時に放送をかけるという方式でしたが、それでは、予定を立てにくいということで、年間を通しての予定表を作りました。（1年生が5校時まである水曜日と木曜日を選んで日程を組んだ。）そして、「昼休みウォッチング」の日には、職員室の黒板にグループ名と担当の教員名を書き、給食時に放送して集合時刻と集合場所を知らせました。13時30分に集まり、5分たってから出発します。都合で参加できなかった者は後日参加するようにします。人数があまり多くてもやりづらいので、参加を促すことは程々にしました。



「昼休みウォッチング」で使用する道具や教材

1グループに、望遠鏡2台、双眼鏡3台。

2人で1セットずつ（全体で15セット）、図鑑の代わりとして、サントリーの「このトリ、わかるかな？」から27種を選んでカラーコピーし、透明のA3ソフトパスケースに入れたもの。



「昼休みウォッチング」の実際の様子から

最初の頃は、1キロちょっとのコースを歩き、2～3の地点で野鳥を望遠鏡の視野に入れて、小さい子から順に見せていました。しかし、これでは時間がかかりすぎる傾向があったので、その後は、歩いて5分の所の開けた畑付近で10分間ほど野鳥を見て、もどるという内容に変えていきました。

キジバトやヒヨドリ、スズメが常連でしたが、冬になるとドバトを追うオオタカや竹藪で餌を探すアカハラやトラツグミなどを見ることができました。活動の結果は表3の通りです。高学年に比べて低学年の方が、興味・関心の度合いが高いようです。



「昼休みウォッチング」の意義

愛鳥活動のメインとなるプログラムは、やはり

野外に出て野鳥を実際に見ることです。しかしながら、全校の子供たちが何らかの形で野鳥を見つけていくことはかなり難しいことです。

教師任せにすれば活動にムラが出てきてしまいますし、かと言って早朝探鳥会などの企画をしても参加者は片寄ってしまいます。また、学年探鳥会をやっても参加者が多すぎてしまい、野鳥とのかかわりが薄らいでしまいます。

このように、全校の子供たちが直接野鳥を見る機会が確保できにくくなってしまっているのが現状です。

その打開策として考え出されたプログラムがこの「昼休みウォッチング」なのです。この愛鳥活動は、神奈川県厚木市立荻野小学校の「昼休みウォッチング」を参考にして、実践してみたものですが、子供たちの反応は実に生き生きしたものでした。

この活動は、学校の近くに比較的広く安全な場所があれば、街中の学校でも工夫次第で実践可能です。近くの小河川や社寺、公園、屋上などでトライしてみてください。

「昼休みウォッチング」の展開例

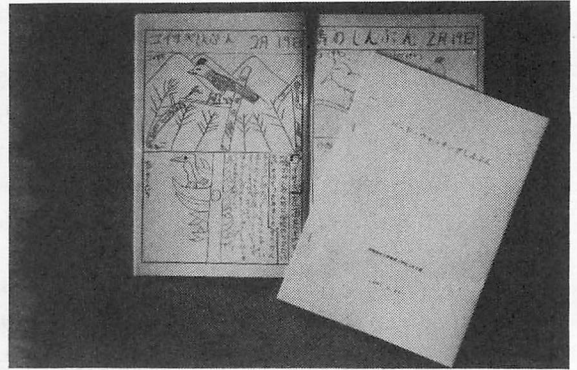
「昼休みウォッチング」で得られたデータをもとにして、フィールドのどのあたりにどんな野鳥が見られるかなどを図示した「フィールド野鳥マップ」や、いつ頃どんな野鳥が見られるかを示した「野鳥ごよみ」などを、愛鳥委員会の子供たちが作り展示すると、全校の子供たちの関心も高まるでしょう。

また、「ウォッチングだより」の黒板（掲示板）をつくり、「?月?日のようす」というようなタイトルでフィールド野鳥マップに見られた野鳥のカードなどを貼って全校の人たちに見てもらおうと、これから参加しようとする子供たちの意欲づけにもなります。

その他、ウォッチングだよりのポストを設け、参加した子供たちから、「こんな鳥見たよ。」というような情報を集めて、給食時の放送で紹介して意識を高めたり、各クラスでウォッチングに行った子供たちが協力して「ウォッチング新聞」をつくったりするといったように、活動を広げることもできます。

しかし、このような“しかけ”も、主役である子供たちの自主的な取り組みを目指したものであることは言うまでもありません。そのためにも

活動を継続していけるように工夫していくことが大切です。



最後に、注意することとして、次のことを述べておきます。

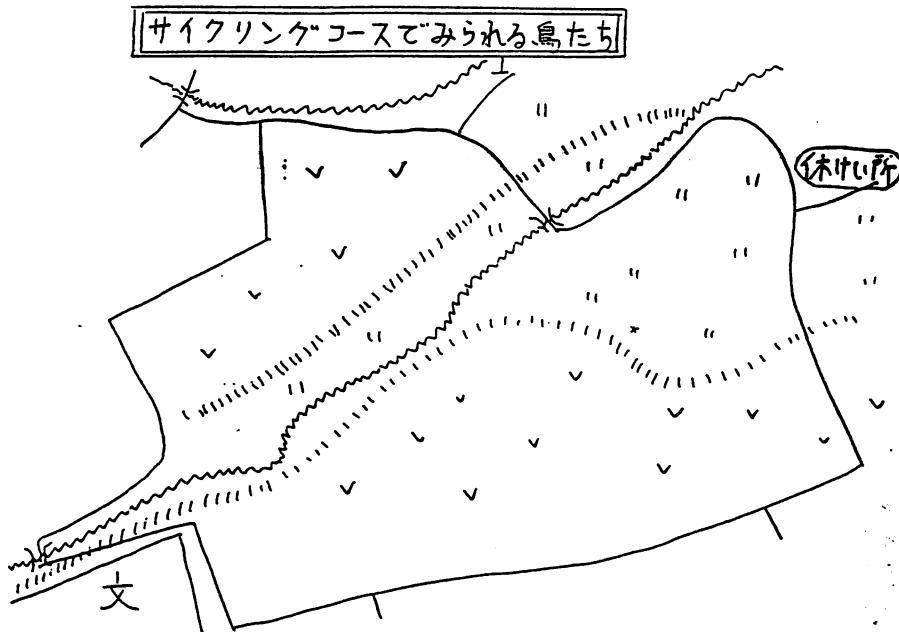
ただ野鳥を識別することだけを続けていくと、子供たちは「また、スズメだ。」というふうにな新鮮な感動を失い、じきに飽きてしまいます。

鳥を見ることのポイントの一つに、同じ所で身近な鳥を見続けるということがあります。鳥たちのくらしや生きざまを見続けることによって、初めて、私たちのくらしや生き方を見直していこうということにつながるのです。

鳥は生態系の上部に位置していますから、鳥の生息状況に変化があれば、それは、その地域の生態系が崩れ、自然環境に何らかの異変があったことを示しています。それは、とりもなおさず私たち人間のくらしにもマイナスの影響が出てくることを想起させるものです。

子供たちが「また、スズメか。」と言い始めたら、鳥を見つけて名前を当てることから、もう一歩踏み込んで、鳥のくらし（例えば、どんな餌を食べるのか。どこで眠るのか。）に目を向けさせましょう。鳥のくらしを見つめることは、子供たちにとって、新しい発見のチャンスなのです。

[フィールド・ガイド]



2. 鳥の名まえが知りたいときは、次のようなことに気をつけて、鳥をみて下さい。

- ① 大きさ. スズメくらいか、キジバトよりも大きいとか、スズメとカラスの中間(ちがひ)くらいだったというふうに大きさを知ることが大切です。
そのために、スズメ、ハト、カラスの大きさはよく覚えておきましょう。
- ② 色. 全体的にどんな色か、^{かぶ}顔やおなか、しっぽやせなかなど、^{せんたい}からだのいろいろな所の色をおぼえておきましょう。
- ③ からだのようす. 足が長いとか、口ばし(くちばし)が長いとか、しっぽがみじかいとか、^{しっぽ}しっぽのこともよくみて下さい。

* 鳥をみるときは、小さなメモ帳とえんぴつがあると、みてわかるなからた鳥のようすなどをメモして、あとで先生にきくとわかることがあるよ。

NO.	種名	7/5	12	9/6	8	9/13	20	22	27	10/6	25	7/27	11/15	21	29	12/6	8	13	1/12	23	24	26	2/7	9	7/13	21	25	21	23	28	3/6	7	9/3	13	14				
	参加人数	19	24	20	17	27	23	25	31	22	21	23	27	20	20	28	21	22	23	17	28	9	12	20	20	20	25	21	21	30	28	3/6	7	9/3	13	14			
58	ゴサギ	*							*				*																										
121	オオタカ																																						
148	キジバト								*				*																										
268	キジバト	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
314	カワセミ																																						
332	ヒバリ																																						
335	ツバメ	*																																					
342	キセキレイ								*				*																										
343	ハクセキレイ								*				*																										
344	セグロセキレイ	*							*				*																										
351	タヒバリ								*				*																										
355	ヒヨドリ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
357	モズ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
375	ジョウビタキ																																						
383	トラツグミ																																						
387	アカハラ																																						
389	シロハラ																																						
392	ツグミ																																						
397	ウグイス																																						
428	シジュウカラ																																						
435	ホオジロ																																						
447	アオシ																																						
457	カワラヒワ																																						
471	イカル																																						
474	スズメ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
478	ムクドリ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
483	オナガ																																						
488	ハシボソガラス								*				*																										
489	ハシブトガラス								*				*																										
	ドバト								*				*																										
	セキレイ								*				*																										
	七ヶイイノコ								*				*																										
	種類数	5	5	7	8	6	6	7	9	11	8	10	10	10	10	7	12	9	15	11	10	12	7	12	7	8	9	11	10	9	10	9	9	8	8	6			

十は探鳥時間前後の記録(参考)
 Cは地鳴きで声のみ
 Sはさえずりで声と姿の記録
 Fは飛行移動中の記録
 時間は13:30~13:50頃までの記録
 環境は小さな川, 2本と田畑

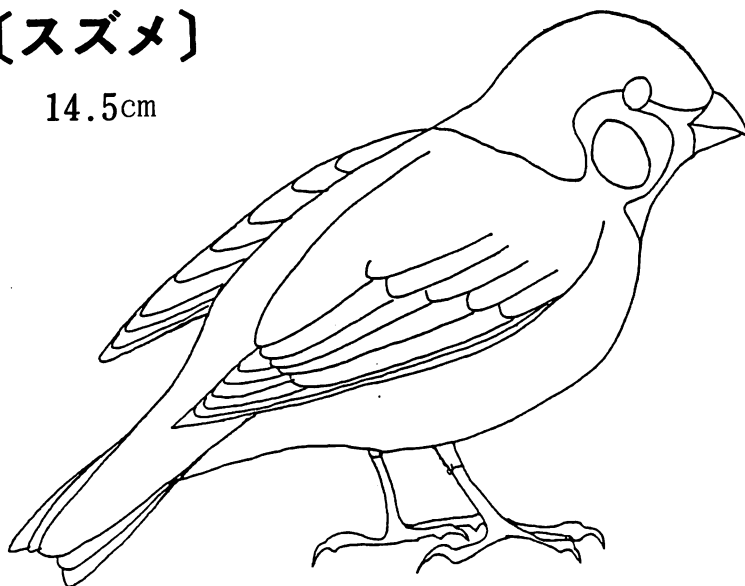
ぬりえコーナー

常務理事 平田 寛重

今回から、身近な野鳥のぬりえを何点かずつ紹介していきます。このまま等倍なり拡大なりして印刷して、学校や地域での愛鳥活動でお役立てください。なお、この資料は、作者（磯部道枝氏）のボランティアでみなさまにお届けするものですので、参加費無料のプログラムでのみお使いください。

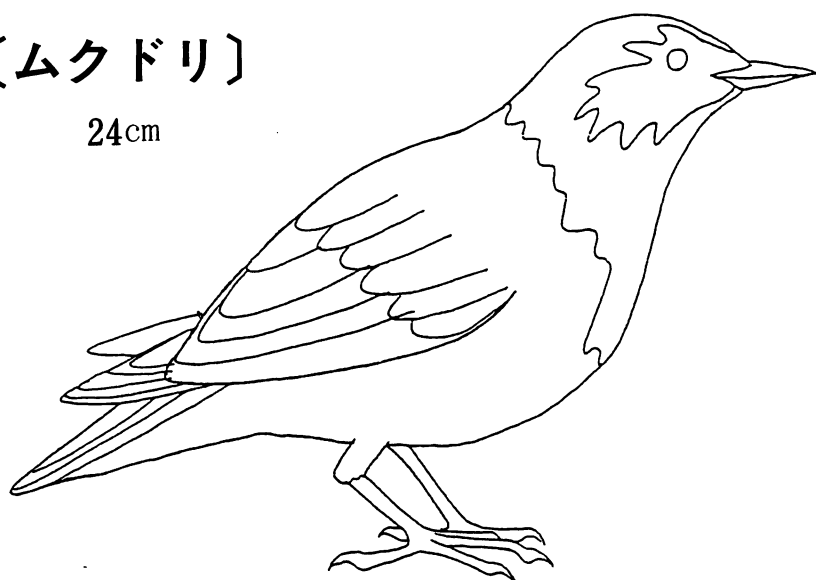
〔スズメ〕

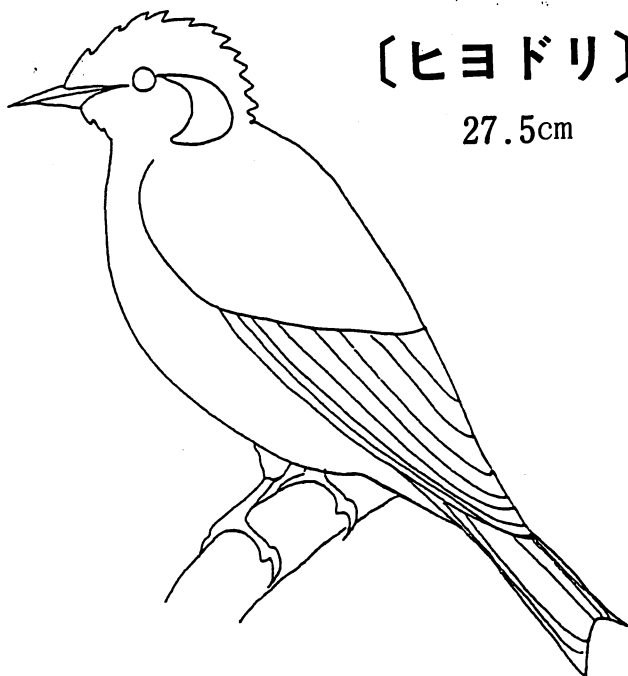
14.5cm



〔ムクドリ〕

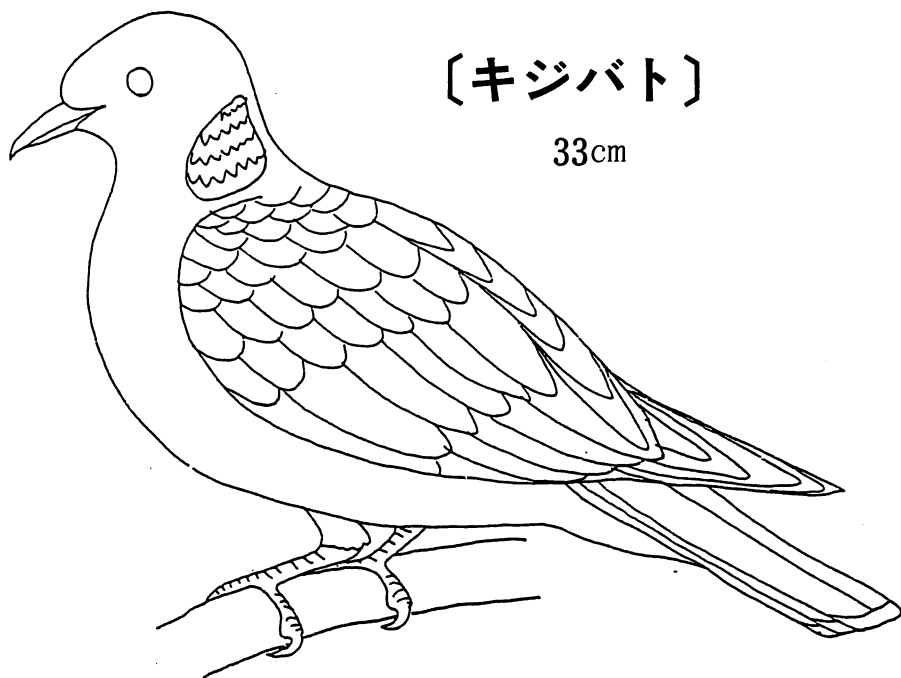
24cm





〔ヒヨドリ〕

27.5cm



〔キジバト〕

33cm

事務局日誌

	常務理事	岡本 嶺子	
10/4 (金)			
38号編集会議	渋谷 J A P B	2名	
10/19 (土)			
38号編集会議	早稲田 J A P B	2名	
10/23 (水)			
38号編集会議	学習院初等科	2名	
10/30 (水)			
常務理事会	早稲田 J A P B	6名	
11/27 (水)			
常務理事会	早稲田 J A P B	5名	
12/3 (火)			
39号編集会議	早稲田 J A P B	2名	
12/4 (水)			
39号編集会議	早稲田 J A P B	2名	
12/5 (木)			
39号編集会議	学習院初等科	2名	

編集後記

野鳥観察体験記をお書きいただいた赤石さんは北海道の方です。この夏の夏期研修会の折りに、すばらしいヤマセミの写真と撮影に関する様々なお話をうかがいました。

如何にしてヤマセミに近づくかについては本文で触れられていますが、この距離まで近づくことができると、800ミリとか1000ミリとかの超望遠レンズでは長すぎて使えないのだそうです。ちょっと驚きました。通常、超望遠レンズを使っても、野鳥のいる風景は撮れても、野鳥そのものを大きく撮ることは難しいものですが、それだけに赤石さんの努力と工夫、観察継続の姿勢には全く感心してしまいました。大切なのは、超望遠レンズを使うことではなく、いかにして彼等に近づくことができるかということ、そしてそのことの意味を改めて教えていただいたように思います。(杉田)

「愛鳥教育」No.40の会員からの活動記録の投稿についてのお知らせ

事務局

総会の事業計画でも触れましたが、「愛鳥教育 No. 40」で会員の活動記録を取りまとめる予定でおります。

この企画の主旨は広く会員による愛鳥教育の実践活動を紹介し、会員同士の情報交換や本会の活動の活性化を図ることです。

内容については、愛鳥活動の実践記録が主で、学校全体の活動から、学年、クラス、クラブまたは、国語の授業や生活科の取り組みなどといういろいろ考えられます。学校ばかりでなく幼稚園や公民館、子供会や自治会などでの活動などもあったらユニークなものができあがると思います。小さな活動でも結構です。継続すれば力になります。また、みんなと手をつなぐことも力になります。奮って投稿ください。

締切は本年12月末日までということにします。送り先は全国愛鳥教育研究会事務局です。不明な点がございましたら、事務局までご連絡ください。

事務局移転のお知らせ

当研究会は、財団法人日本鳥類保護連盟内に事務局を置かせていただいておりますが、去る11月に財団法人日本鳥類保護連盟が事務局を移転しました。それに伴い、当研究会の事務局も下記の新住所に移転いたしましたので、お知らせいたします。FAXもご活用ください。なお、郵便振替の番号は従来そのまま変わりません。



案内図

事務所

愛鳥教育 No. 39

平成3年12月20日

発行人 江袋島吉
 発行所 全国愛鳥教育研究会
 住所 〒162 東京都新宿区弁天町1番地
 三河屋ビル3F
 (財)日本鳥類保護連盟内
 電話 03-3205-7861
 FAX 03-3205-7863
 会費 3,000円
 郵便振替 東京8-12442
 印刷所 祐文社

愛鳥クイズ

【前回の解答】

左上：ジョウビタキ 右上：シメ 左下：イカル 右下：モズ

参考： 中村登流： 野鳥の図鑑 陸の鳥，保育社

今回は志向を変えて、♂♀の形態の違いに目を向けてみましょう。

野鳥（日本産）の♂♀の違いにはいくつかのパターンがあります。例えば、

- ① オシドリのように体の模様が雌雄でほとんど異なる場合
- ② シジュウカラのようにからだの一部の模様が少し異なる場合
- ③ トビのように雌雄で大きさが異なる場合
- ④ スズメのように外見ではほとんど判定できない場合

の4つのパターンで次の鳥たちの雌雄の違いを分けてみましょう。

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| A ハシボソガラス | B オオルリ | C コマドリ |
| D ジョウビタキ | E ツグミ | F ウグイス |
| G ハヤブサ | H コゲラ | I カルガモ |
| J キジ | K キクイタダキ | L イソヒヨドリ |